The Kansai University News

第27号

関西大学通信

関西大学広報委員会
大阪府吹田市山手町3丁目

新入生の皆さんへ

学長　広瀬捨三

新入生の皆さん、ご入学おめでとう。難関を突破されて、めでたく志望の学部に入学され、今は希望に胸がふくらみ、また大学生活とはどのようなものかと少し不安な気持もあるような状態ではないかと思います。古代の社会や、今でも未開の社会では、イニシェイション（入会式）がありまして、人生のそれぞれの段階で、その段階に入る儀式で、丁度一夜で、蛹が蝶になるような変化の激しいものでした。文明社会になるほどこの区別がいまいになるのだと申しますが、入学式などもあえて粉砕を叫ばなくても、当然なくなるかも知れませんが、学費を払ったり、所定の手続をしたりする、実質的なことをしなくては、やはり本学の学生になったとは申せません。

皆さんは今までも、小学、中学、高校とかなりな学校生活を過ごしてこられました。今また四年間の大学生活をされようとしており、この間に皆さんは早くも社会の制度上でも、一人前の成人ということになります。皆さんと同年輩の多数の人は既に高校を出てすぐ社会へとび出して立派に働いておられます。皆さんは学生の身分に甘えてはなりません。立居振舞は勿論立派な一人前のことをしなければなりませんが、いまだ修業の途上にあるという謙虚な心を忘れてはなりません。或いは人の一生そのものが修業の連続でありますが、ことに学生の間は一人前にして一人前にあらずです。この点において自らを強く律しなければ、相手が対等の者として扱ってくれるからといって己惚れてはなりません。

私は卒業生に、卒業式は社会の一員になる儀式だと申しました。それなら皆さん方はまだ幼虫であり蛹です。保護が必要であり繭が必要です。誰か学生諸君をおだてて、社会改革の戦士の如くいうのは後進国のすることです。

しかし諸君の大学生活が今までと異なる点は、自由な人格を認められて、のびのびと勉学出来る点にあるのではないでしょうか。その代わりに勉学するかしないかは、いつにかかって皆さんの決心次第です。この点強制されないからとて、勘違いをして怠けてはなりません。自由であることは、同時に自分で責任を持たねばならぬことで、落伍者は遠慮なくどしどしと落としてゆきます。

皆さんの時期に私淑する人があってしかるべきで、そのような人を早く見つけるべきです。今人でも古人でもかまいません。あまり私淑し過ぎて、真似しなくてもよいのに下手な筆蹟まで真似する人もありますが、そうして人間は成長してゆくのです。

またそうした理想の人物、高嶺の花を作るのも必要ですが、皆さんの時期には心の通い合う友達を見つけて下さい。損得なしに出来る友達は学校以外にはありません。切磋琢磨し合えるのは、先生ではなくて友達です。今までもよい友達をお持ちでしょうが、大学生活では一層この方面でよい友を見つけて下さい。またこれが共同生活の大切なところで、独学では得がたい学生生活の有難いところです。

最後に大いに本を読んで下さい。現代は視覚や聴覚にあまりに頼り過ぎているようです。なるほど百聞は一見に如かずでその通りですが、映像が消えて果して残るものは何でしょうか。この四年間はじつに皆さんの将来を決定する大切な時期であることを自覚して勉学一途に励まれんことを祈ります。

目　次

〔一　面〕〝新入生の皆さんへ〟学長　広瀬捨三
〔二・三面〕各学部長からの〝新入生諸君へ〟、卒業生より新入生へ、二部ワンゲル同行記
〔四・五面〕キャンパス案内（マンガ風）、年間行事予定表
〔六・七面〕座談会〝一般教養とは何か〟、三冊の本
〔八　面〕世界の大学と学生生活、図書館長から新入生へ、リレー随想、松本暉男教授の急逝を悼む、編集後記

千里眼

現代版おとぎ話を一席、この機会にあなたや私はどのパターンに近いでしょうか、一寸考えてみるのも一興でしょう。

・・・・・・

あるところにうさぎと亀と蛙がおりました。この三匹が向こうの丘の松の木に誰が先に行きつくか、かけっこしようということになりました。うさぎはぴょんぴょんはねて暫くして後をふり返りますと亀の姿も蛙の姿も見えません。それで〝煙草にしょ〟と木陰で一服しましたがそのうちにすっかり眠り込んでしまいました。夢の中でうさぎは背中に翼がはえ天っ空を一飛びに飛んで目ざす緑の丘の上で跳んだりはねたり寝ころんだり大変愉快でした。一方蛙のほうは小ステップながらピョンピョン跳んで進んで行きました。随分行ったところでうさぎが眠っているのに出くわしました。旅は道連れ世は情けと、蛙はゲロゲロ鳴いてうさぎを起こそうとしましたがうさぎはぐっすり眠っていて起きそうにありません。あまつさえ何を勘違いしたのか眠ったまま嬉しそうににっこりと笑っています。そこで蛙は起こすのをあきらめてまた丘を目指して進みました。かれこれ行くうちに一寸した水溜りが目につきました。そこで平泳ぎをし草の葉と戯れておりました。亀のほうは何分にも首が短いものですから頭で草をかき分けかき分けして進みました。下を見ながら歩いていますので色々と珍しいものが多くちっとも退屈しませんでした随分暫く行ったところで水のにおいと蛙の歌い声が聞こえました。それで亀もそこで一泳ぎし、二匹で仲良く揃って丘の上に行きました。

（N）

新入生諸君へ

新入生諸君、入学おめでとう。これから四年間、相手をさえて充盛な研究活動・クラブ活動を通じて発現する若いエネルギーを、われわれは大いに期待するものであります。大学生活の四年間は、諸君の永い人生にとって、最も楽しかるべき時期であります。

高校時代あるいは浪人時代の受験に打ち克って、今ここに八十有余年の歴史と伝統を有するわが法学部の学生となられたのであります。われわれ法学部のスタッフは、新たにわが部の一員に加わった諸君を心から歓迎するとともに、諸君のまま面よき友として、入生諸君のフレッシュな感覚と正入学おめでとう。これから始まる大学生活に不満ばかりを抱かって来た立派な伝統を受験生活を乗り越へ、激烈な人試

よき伝統に新しきものを

法学部長　池垣定太郎

長いというところに意味があるのではありません。また、後生大事にするべきものでもない。正しい伝統を強調し、新しいものを加え、クレエイトすることによって発展するものであります。その創造的発展のために、諸君はまさに大学生活の四年間は、諸君の永い人生にとって、最も楽しかるべき時期であります。

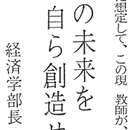
高校時代あるいは浪人時代の受験勉強に明け暮れた暗い日々は、一転して、希望と夢に満ち溢れた明るい日々に変わったのであります。

学問の厳密な研究のためにはいろいろな活動を通じて発揮される若い生活の中で、学問の研究は、単に講義やゼミナールに参加するだけでは、失望するに違いない。

高校までの学生生活は、一層深い強い力が働いていたとすれば、それは、諸君自身で決めることである。ここに、新入生の諸君に、一層深い思索と、一層地道な勉強を期待する所以でもある。

一層深い思索と一層地道な勉強を

文学部長　藤本　是



作品、ことにその歴史ものいくつかを、自ら評して、次のように書いている。「これらの作品を見ても、菊地氏がリベラリストとして、その創作によって封建思想の打破に努めていたことがハッキリするであろう。」と。また特に「早稲田の彼方に」については、「早稲田の彼方に」もくも膨れ（カタキウチ）を否定した作品である。」とある。

これは菊地の批評としては、如何とも理解なものである。

新しく経済学部に入学された諸君に、諸君は、将来の大学生活への希望と憧とはどうなったと何か彼と比して空、不安と感傷にたられるのではないでしょうか。この諸君を仮りに想定して、この現実に、諸君は、諸君の大学生活への希望と憧とはどうなったと何か彼と比して空、不安と感傷にたられるのではないでしょうか。この諸君を仮りに想定して、この現

実から脱皮するに必要なことを、諸君は、諸君の大学生活への希望と憧とはどうなったと何か彼と比して空、不安と感傷にたられるのではないでしょうか。この諸君を仮りに想定して、この現実から脱皮するに必要なことを

栄光の未来を自ら創造せよ

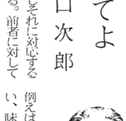
経済学部長　松原藤由

形成をする相互啓発の雰囲気を作ることが、諸君の大学生活への希望と憧とはどうなったと何か彼と比して空、不安と感傷にたられるのではないでしょうか。この諸君を仮りに想定して、この現実から脱皮するに必要なことを

実から脱皮するに必要なことを

大学生活の明確な目標をたてよ

工学部長　山口次郎



一般教養を軽視するな

商学部長　清水宗一

人間性の調和的発展を

社会学部長　野崎治男

新入生諸君へ

卒業生より新入生へ

新入生諸君。ご入学おめでとう。君たちがこれから始まる大学生活に不安と期待を胸に抱いている真剣な顔を見ているとはいられない。卒業するとは、四年前の私の姿を思い出さざるをえない。四年前の私は、何の目的もなく、ただ漠然と大学生活に入ったのであった。

ここに諸君たちに先輩としてひと言だけ書いておきたいことがある。諸君は大学での生活が、これまで諸君たちが送ってきた学生生活と全く違った態度でなければならないという考えが、せっかく期待して入ってきたのであるならば、その生活変化に適応できなかったとすれば、失望するに違いない。

高校までの学生生活もきっと楽しいものではあったであろうが、大学生活もきっと楽しいものであるに違いない。

学生生活を送ったかを紹介する。紙面の都合でわずか七名の場合しか紹介できないが、もちろんこれ以外にも多くの先輩たちが、それぞれ、自身で決めることであるから、諸君たちも自身で決めることである。

ここに、新入生の諸君に、一層深い思索と、一層地道な勉強を期待する所以でもある。

（ある卒業生の言葉）

新入生諸君。君たちがこれから安と期待を胸に抱いている真剣な顔を見ているとはいられない。卒業するとは、四年前の私の姿を思い出さざるをえない。四年前の私は、何の目的もなく、ただ漠然と大学生活に入ったのであった。

ここに諸君たちに先輩としてひと言だけ書いておきたいことがある。諸君は大学での生活が、これまで諸君たちが送ってきた学生生活と全く違った態度でなければならないという考えが、せっかく期待して入ってきたのであるならば、その生活変化に適応できなかったとすれば、失望するに違いない。

高校までの学生生活もきっと楽しいものであったであろうが、大学生活もきっと楽しいものであるに違いない。

学生生活を送ったかを紹介する。紙面の都合でわずか七名の場合しか紹介できないが、もちろんこれ以外にも多くの先輩たちが、それぞれ、自身で決めることであるから、諸君たちも自身で決めることである。

ここに、新入生の諸君に、一層深い思索と、一層地道な勉強を期待する所以でもある。

（ある卒業生の言葉）

泥だらけの遺跡発掘

大学院文学研究科四十五年修士　河上　邦彦

奈良県教育委員会勤務

◆私は大学の大半を考古学研究室ですごし、夏や冬、春の休暇には先生や先輩・後輩たちと大阪・奈良・和歌山へ、遠くは徳島・岐阜・群馬にまで足をのばして発掘調査に参加した。多くの発掘のうちやはり忘れられないのは、初めての調査である。地表からわずか五十糎程度のところから次々に掘り出される二千年前の土器や石器、あるいは許日作ったように見える木製の器や竹で編んだザル、さらに当時の種やドングリ。古代人の手で掘り出すことに興奮し、考古学は現在と過去をつなぐタイムマシンのようなものだなと感じたことが思い出される。

考古学は入り口すい学問であるが入ってみると なかなか難しい。末永雅雄先生が「考古学は学問半分、技術半分だ」とよく言われるように、実際の研究活動だけでなく、時には土方であり、写真家であり、測量技師にも整図家にもならなければならない。泥だらけの服を着、暑い時には麦藁帽をかぶり、手には軍手、足は登山靴や地下足袋といった服装でぞろぞろ歩いていたら、子供が「乞食かメクラを持って歩いている。と言ったこともあった。しかし皆、考古学が好きで集った者ばかり、楽しく飽いない大学生活を送れたと思っている。

楽しかった徹夜実験

工学部応用化学四十七年卒　橘　俊作

神戸理化学工業株式会社勤務

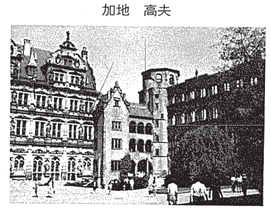
◆工学部に入ってからの四年間にはいろいろと楽しい事、苦しかった事が思い出されるが、いちばん楽しかったのは四年次生になってからの卒業研究である。その一年間は夏休みも日曜日もほとんど無く、また徹夜で実験もした。そんな一年間がよく楽しかったものだといぶかる人もあるだろうがこれもよき先生、よき先輩のおかげだと思っている。ひとつの研究室は家庭のようなもので、そこには笑顔があり、知識の交流があり、また親しい仲にも礼儀がある。全員の元気な顔が揃っているだけで楽しく、一人でも休むと何か寂しい感じになってくる。

徹夜実験では、大学院生の先輩と一緒に夜食を食べに外に出かけたり、ラーメンや果物、お菓子を買ってきて、実験が先に一段落した先輩がラーメンやコーヒーを作ってくれたこともあった。眠くなると皆で声をはりあげて歌を唱ったこともあった。それが今では思い出の歌として私の頭に刻み込まれている。実験が終る頃空が白けはじめる。そんな時、心の中には充実感が満ち溢れ、自分に勝った喜びが湧いてくる。

実験が終った時の喜びばかりでなく、一緒に実験している人たちとの心と心の触れ合いもまた楽しい思い出だ。人生や恋愛についての話し合い、私が悲しみに沈みきった時に励ましたわってくれた先輩たち、すべてが関大でのよき思い出につながることである。

四年間に三度の海外旅行

加地　高夫



経済学部四十七年卒

森藤株式会社勤務

◆私はこの四年間に、国際教育交換協議会によるアメリカ旅行、台湾・香港への一人旅、ヨーロッパへの一人旅という三回の海外旅行を経験した。

生まれて初めて飛行機に乗り、広大なアメリカにつくと、すぐにアメリカの若者たちと友達になり、よく招待されたり、夜遅くまで従業員が働いているのも印象的だった。香港では「スリに注意」の看板や実弾をこめたライフルを持つガードマンに驚かされた。

ヨーロッパの旅では伝統や芸術を重視する国民性に感銘をうけ、ソ連では物資の不足が目につく一方社会保障が完備していると点で日本と全く対照的に思えた。

こうして私の大学生活は旅行に明け暮れたが、日本と他の国との比較・他の国から日本への認識など、考えさせられることが多く、社会人として生きていく上で大きな指針となるものと思う。

司法試験に合格して

法学部政治学科四十四年卒　河田　瞭美

大阪地方裁判所に勤務し、司法試験に合格本年四月より第二十六期司法修習生の予定

◆私は大学を卒業後ちょっとの契機に司法試験の勉強をすることになり、それから三年、運よく試験に合格した。これまで勉強を続けてきたのは、大学の生活を通じて、ひこれを経験するためであったと思う。私はクラブ活動にあると言われているが、四年間、関西大学弁論部員として活動した。クラブ活動は、「団体生活における協調性と、大行事を計画し実行する能力を与えてくれるとともに、実社会における情況判断能力とを、それを乗り越える力を養ってくれる。

第二に、自分の専門とする学問の分野の基礎的な思考方法や、勉強のやり方を身につけさせたと思う。私は各年度、最低限勉強したい課目を定め、その授業には万難を排して出席した。自分でわからない箇所があれば自校の先生だけでなく、他校の先生のところへも伺って教えてもらった。自分の手の届くところに各学問の権威の先生がおられるのだから積極的に交流を求めることが必要だと思う。

第三に、司法官試験を勉強する者にとっては、司法研という組織は本当にありがたいと思った。いろいろと質問に答えてくれる先輩がおり、答案構成を指導してくれる先輩がおり、日曜答案練習会もあった。関大にはこうした組織があるので一人で悩むこともなく、勉強したい事をどと自分が思ったら、すぐ、それを乗りうか力一杯やってほしい。

強い精神力と体力を養う

塩川　明人

学習・友人・健康・仕事

商学部(第二部)四十七年卒　山田　豊

ワクヂ方薬品株式会社勤務

◆私が勤労学生としてすごした四年間の大学生活を四つの面からふりかえってみたい。

一、学習。大学は学習するためのなところであるといえる。研究する場と時間と材料が与えられているのは大学だけの特権なのだ。

二、友人。大学には全国各地からさまざまな人たちが集まっている。年令も技法としているのでよき友人を作るチャンスは多い。クラブ活動やサークル活動を通じて一生つき合える友人を作ることも大学生活の大切な側面と考える。

三、健康。私たちは身体を作る大切な時期にある。とくに第二部は、働きながら学ぶ状態にあるから健康管理を必要とする。私のこれまでの経験によると、とにかく健康第一を心がけることが必要である。学業と仕事はどちらもとも大切であるが、学生という立場からすれば、仕事よりも学業にウエートをおくようにしてくべきである。

最後に一言。「これからの大学は、大学人はどうあるべきか」をしっかりと考え、これからの学生生活を送られることを望みたい。

基礎知識をガッチリと

社会学部心理学専攻四十七年卒　平田　明

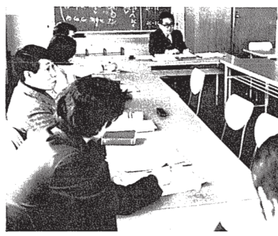
大阪市役所民生局勤務

◆関大での体験の中からアドバイスできるものをとしたいと思います。

私は、消費者行動における認知のスケーマ（危険）とは人が何らかの行為をおこなう時、その行動の結果が前もって予測できない不確実なもの時、であるため、それが一種のリスクとして認知されることをいう。人の行動にはこのリスクが影響するが、リスク認知は主観的なもので、性格や状況によって行動に変化を与えると予想される。そこでゼミの卒業研究ではこの仮説を検証するために関大生二百名を対象にした調査を実施・分析した。

その体験を通していえることは、「ローマは一日にして成らず」ということで、基礎応用を導くということである。調査を行なう場合不可欠なものに社会調査や推測統計学の知識がある。とくに推測統計学は調査だけでなく実験・観察にも必要であり、行来そのような専攻・職業を志す人は、ぜひ講習しておかなければならない思う。

一・二年次の科目はとかく軽視しがちであるが、この時代で基礎をガッチリと固めておかなければ、専門に入ってから何も出来ないということになる。基礎的な知識をしっかり身につけておくことが、大学生活を豊かにできるという実感を持った。



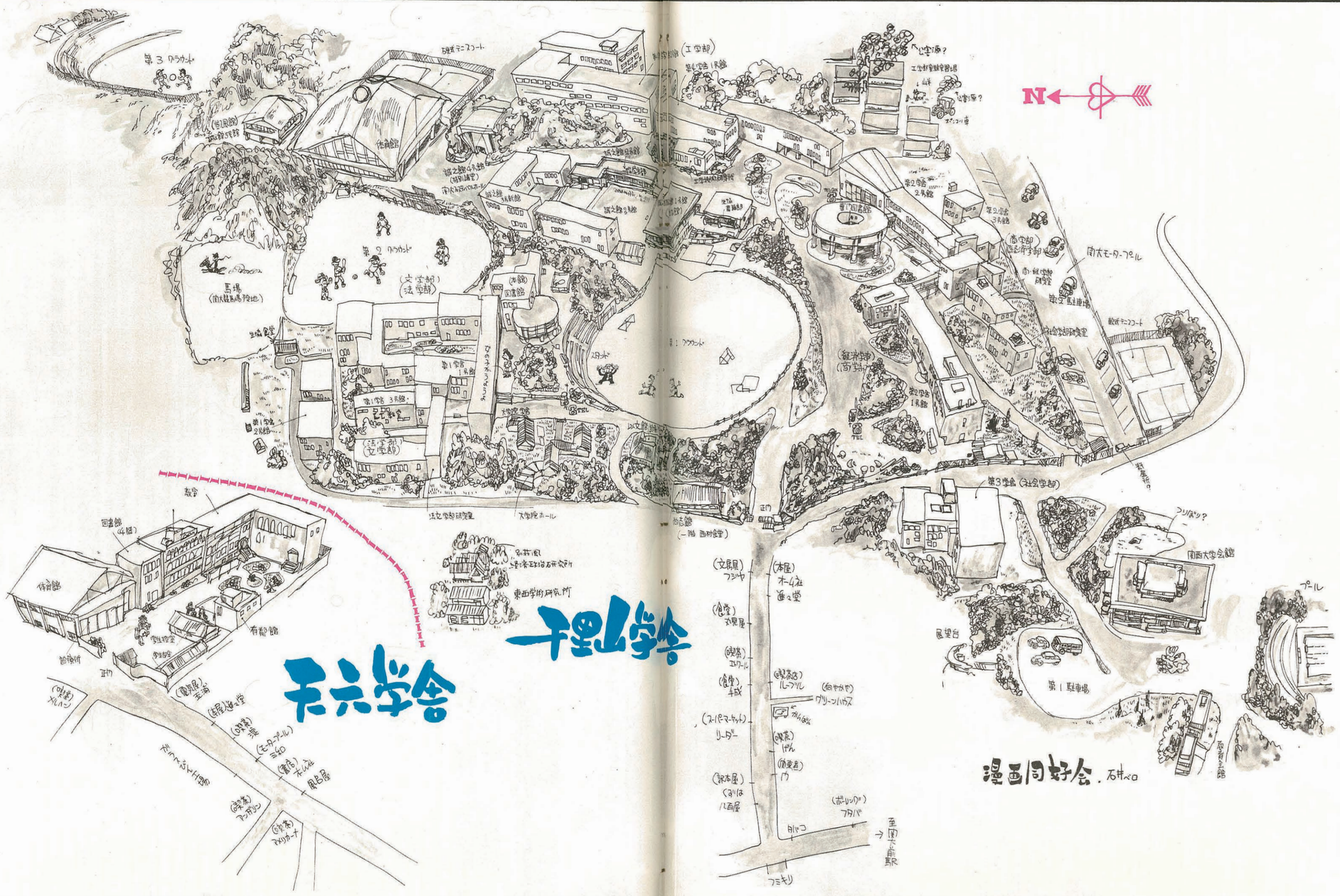
二部ワンゲル同行記　関大黒菱山の家での合宿

◆二日目の朝は快晴だった。モルゲンロートの白馬三山はみるみるいろどりをかえていく。ここからは不帰のキレットは見えない。今日は第一ケルンまで登ろう。

二部ワンダーフォーゲル同好会の面々が八時に朝食をすませて小屋の前に勢揃いする。というと聞こえはいいが、わがワンゲルスタイルはおせじにもスマートとはいいかねる。中でもオーバー・スポンはカウボーイのローハイドのようにダブダブで、スキーの練習を始めても中身の脚がどっちの方向をむいているのやらサッパリ外から判らないのが困りものだ。そこでフームをとらせて外から手さぐりで脚をさわってコーチすることになる。ことわっておくが女子部員は今回は参加していない。

われわれのスキーはスキーが目的ではない。荷物を背負って深雪を安全に下ることである。そうなれば、ただもちろんこけつまろびつの猛訓練が始まる。一区切りついたところで第一ケルンまで登ろうと提案する。下りにもう一言自信がもてて戻ってみる連中をおどしたりすかしたりしてつれて上るのはなかなか大変だった。五竜と鹿島槍の展望を楽しんで、いざ猛烈な滑降といきたいところだが、遂にスキーを脱ぎ鞍カンジキで下った。S君が、小屋に一番に爆着したのには開口した。

社会学部助教授　池田　進）


N
第3グラウンド
第2グラウンド
第1グラウンド
第1グラウンド
第1学舎
第2学舎
第3学舎
第4学舎
第5学舎
第6学舎
第7学舎
第8学舎
第9学舎
第10学舎
第11学舎
第12学舎
第13学舎
第14学舎
第15学舎
第16学舎
第17学舎
第18学舎
第19学舎
第20学舎
第21学舎
第22学舎
第23学舎
第24学舎
第25学舎
第26学舎
第27学舎
第28学舎
第29学舎
第30学舎
第31学舎
第32学舎
第33学舎
第34学舎
第35学舎
第36学舎
第37学舎
第38学舎
第39学舎
第40学舎

一年次生に対する講義の大部分は語学と一般教育科目である。そして、「高校の延長ではないか」との疑問をもつ学生が多い。そこで、「一般教養とは何か」ということでこの座談会を行った。これは新入生のみならず、在学生、教職員の方々にも是非読んでいただきたい。

座談会 一般教養とは何か

この座談会はまず一般教育の理念、その基盤となったアメリカにおける一般教育の歴史から始まった。しかし、この部分は紙面の都合上、要約させていただくことにする。主として発言された市原岩先生は本学の一般教育改革調査委員会の答申書のまとめ役、友松先生は以前より、専門分野を深く探究することを通じて幅広い人格が形成されると考えられてきた。しかしこれは専門バカを生む素地が内在しており、さらに、ナショナリズムやミリタリズムに直結する要因をもちんでいた。そこで、戦後の学制改革に当り、戦時中の反省と、平和国家、民主国家の一員としてふさわしい教養をつけることを目的として、アメリカのゼネラル・エデュケーションの方式が採用されたのである。しかし、実状は、それぞれ長に伝統をもつ旧制大学の専門教育と、旧制諸校の一般教育とを機械的に組合せた に過ぎず、この組合せはかなり密着すず、教職員の間にも、学生の間にも不満が強かった。さらに、今日のように専門の分化が進んだ現在、産業界からも職能的に心教育の要請が強くなり、中教審の答申などにも「一般教育の在り方について」が盛んに論議されてきた。一応、一般教育と基礎教育という形で教養科目を分けることになっているが、一般教養も専門教育に合併吸収される危険性を持っている。（市原）

一般教養の歴史

日本では新制大学の発足に当り、アメリカの大学教育のシステムを取入れ、一般教育を必修とし、そのアメリカの教育システムで呼ばれるものは、人文・社会・自然の三分野に均衡のとれた教育を目的としている。しかし、アメリカでこのゼネラル・エデュケーションの運動が発生したのは二十世紀になってからであり、それ以前はヨーロッパ流のリベラル・エデュケーションが行われていた。

リベラル・エデュケーションとは何かというと、ヒューマニズムを基盤とする全人教育であり、エリートとしてふさわしい教養を身につけることを目的とし、その中に専門教育が含まれていたのである。しかし、科学および技術の発達と、人文系文化の相対的な停滞というアンバランスが起り、そこでこの教育方針は社会の流れとついていけなくなってきた。この欠陥や弊害が最初に、最も強く表面化したのがアメリカである。アメリカの一九二六年の大恐慌で、それに伴う社会経済の激変は教育面でもリベラル・エデュケーションの破綻を導いた。かくて、人文分野だけでは不十分で、三分野にわたり広い視野を持たせる教育、すなわち、ゼネラル・エデュケーションが生れたのである。（友松）

日本の場合、旧制大学では職業専門教育のみが行われてきた。欧米文化を吸収、消化するための有用一テクス・レルネン・テス・レルネンス」であり、自然・社会・人文の三分野の知識を、ただ単に教養することではない。ゼネラル・エデュケーションの目指すものは、専門知識に根ざした自然と人生に対する生活態度、精神感度の培養でなければならぬといわれている。

生に対する生活態度、精神感度の培養でなければならぬといわれているのである。ところで、その「精神感度」であるが、これは現時点での既成の学問体系や価値観、あるいは社会体制を深く研究、した上で、それに対する批判や抵抗である。ここに初めて自己と学問の出合が生じ、発展と創造が生れる。

現在、学問は急速に専門化、細分化に向い、大学も多元化（マルチバーシティ）しつつあるが、一般教養は人間と職業人、専門人と人間との中に組込まれて行くことに対する抵抗であり、批判でなければならぬ。さらに、学問の全体性・総合性を再和し、多元化を超する統合となわねばなるぬ（友松）

教養と専門

司会　友松先生の結論をうかがっていますと、教養・そして、大学の根底である、という感じを受けますが。

友松　そうです。そうでなければならない、思います。

司会　ところが、そのような点がどうも余裕無されていないようで……。

友松　（現代は）今、さか立ちすぎると、二を逆に総化が大学では必要になってくる。そうでないと、いわゆる専門バカが学部の学問が必要となり、そこにおける高なった不の見方、考え方を消滅する。それによって幅広い人間ができてくる。まあそうでないとけないわけです。近頃てきたこの一般教養課程の傾向、これは逆うべき傾向で、市原先生のおっしゃるように、原点にかえり、再認識されなければならないのではないかと思います。

友松　総合された知識の習得とおっしゃったように思います。が、そうなると、このころは総合の一つを研究する総合専門家などもでさますし、そして、それと教養をうち続けるという問題にもなってきています。

保田　知識習得から次元で、総合的にしろ、細分化された専門教育の方針がだんだんボヤケてくるんですよ。でかから、区別をつけようとするなら、知識はなく、一般教育では程度を問題にする。批判の精神、ダイナミックな認識姿勢というのを培う。これは得の意味ではなくて、モノの見方、考え方――それも遠った系列のは。これを学ぶということ……。

友松　そう察知してただければいんです。まず、他の分野にて自分でアタックしようという精神――自分を開拓し、新しい自分を創り上げていくということ……。

友松　そう察知と、学問の主体性の確立、そこに人間形成と結びつきがあるのです。

司会　そうなると、大学に入った意味より、ある程度専門をやって、その後の方が身につくような気がする。

友松　たしかにそれも……しかし、高校から上って来たばかりで、高校ではそられたものを解釈・習得するだけです。その姿勢を根本的に洗脳する必要がありますね（笑）

高校との違い

藤井　高校と同じなら、ただでさえ大学の四年は短いといってでさえ大学の四年は短いといっていますから、拙到精神、自主的なものを必要とするようになってきたとなれば、やはりリベラル・エデュケーションの本来持っていた持味をもう一度……、もちろんそれに戻れというのではないんですがね。

司会　そうなると、大学に入った意味より、ある程度専門をやって、その後の方が身につくような気がする。

友松　たしかにそれも……しかし、高校から上って来たばかりで、高校ではそられたものを解釈・習得するだけです。その姿勢を根本的に洗脳する必要がありますね（笑）

高尾　たしかにそうでしょうが、人間の主体性の確立といいますか、拙到精神、自主的なものを必要とするようになってきたとなれば、やはりリベラル・エデュケーションの本来持っていた持味をもう一度……、もちろんそれに戻れというのではないんですがね。

司会　そうなると、大学に入った意味より、ある程度専門をやって、その後の方が身につくような気がする。

友松　たしかにそれも……しかし、高校から上って来たばかりで、高校ではそられたものを解釈・習得するだけです。その姿勢を根本的に洗脳する必要がありますね（笑）

市原　その点ではもう一度原点に帰り、大学は慎重に「一般教養とは何か」を考えなおすね。いやその時期きいるのではないでしょうか。

市原　新制大学では、その出発点から「一般教育は必要であると」ちっすれ。

藤井　やはり、いまの大学で……といって言っても、いわゆる「学問のうんのう（歳現）」をわめるのではないですが、とうていそれに対する批判や抵抗が学部の教育だと考え、学生にもいろいろ考えてるんですが、ほかの学部は……という部門の専門教育じゃなくて、機械なら機械、電気なら電気……という部門の専門教育じゃ、ほんとの意味の専門教育じゃないと思います。

司会　わたしは工学部ムんで、専門教育と称していても、ほんとの意味の専門教育じゃなくて、機械なら機械、電気なら電気……という部門の専門教育じゃ、ほんとの意味の専門教育じゃないと思います。

藤井　新制大学では、その出発点から「一般教育は必要であると」ちっすれ。

市原　先に一般教育と基礎教育とを再検討しなければと考えますね。いやその時期きいるのではないでしょうか。

市原　新制大学では、その出発点から「一般教育は必要であると」ちっすれ。

藤井　……と、一般教育と専門教育とを分けるのは、専門教育と称していても、ほんとの意味の専門教育じゃなくて、機械なら機械、電気なら電気……という部門の専門教育じゃ、ほんとの意味の専門教育じゃないと思います。

司会　わたしは工学部ムんで、専門教育と称していても、ほんとの意味の専門教育じゃなくて、機械なら機械、電気なら電気……という部門の専門教育じゃ、ほんとの意味の専門教育じゃないと思います。

藤井　……と、一般教育と専門教育とを分けるのは、専門教育と称していても、ほんとの意味の専門教育じゃなくて、機械なら機械、電気なら電気……という部門の専門教育じゃ、ほんとの意味の専門教育じゃないと思います。

保田　区別がないという指摘のようですが、ボクはやはりあるべきだと思う。また必要だと思います。

保田　区別がないという指摘のようですが、ボクはやはりあるべきだと思う。また必要だと思います。

保田　区別がないという指摘のようですが、ボクはやはりあるべきだと思う。また必要だと思います。

友松　（現代は）今、さか立ちすぎると、二を逆に総化が大学では必要になってくる。そうでないと、いわゆる専門バカが学部の学問が必要となり、そこにおける高なった不の見方、考え方を消滅する。それによって幅広い人間ができてくる。まあそうでないとけないわけです。近頃てきたこの一般教養課程の傾向、これは逆うべき傾向で、市原先生のおっしゃるように、原点にかえり、再認識されなければならないのではないかと思います。

友松　総合された知識の習得とおっしゃったように思います。が、そうなると、このころは総合の一つを研究する総合専門家などもでさますし、そして、それと教養をうち続けるという問題にもなってきています。

友松　総合された知識の習得とおっしゃったように思います。が、そうなると、このころは総合の一つを研究する総合専門家などもでさますし、そして、それと教養をうち続けるという問題にもなってきています。

保田　いえ、わたしは知識習得の意味で言ったのです。

友松　そうなんですが、ただ、その出発点でこうしたのを読めば、多少ともわかる。しかし、読まない人もたくさんいるんじゃないか？　読まんと、わからるかわからんか、わかるんですわ（笑）

一般教養と専門

藤井　そうなんですが、ただ、その出発点でこうしたのを読めば、多少ともわかる。しかし、読まない人もたくさんいるんじゃないか？　読まんと、わからるかわからんか、わかるんですわ（笑）

佐伯　一般教養の過程でそういう教育をやっていく必要があるんじゃないですか。

秋山　ボクもそう思いますね。

佐伯　半年とか一年かけてねえ。

カリキュラムの改革

司会　このへんで、カリキュラムなどの問題にうつりたいと思うのですが……

角田　ちょっとその前に……、友松先生はマルチバーシティを否定するところにユニバーシティを再現する意味があるとおっしゃったのですが、その点もちょっと具体的に……

友松　否定するというかむしろ総合するということです。日本の大学はいろんな学部が集まったものに総合大学という称を与えてはいますが、はたして「総合」の名に価いするモノがあるかどうかです。学部間の学問的交流とか、共通の場に欠けていますね。すると、そこでは学部間を結んだり、問題を拓める境界領域学問の開発が起らない。結局、各学部がタコ壺的存在になってしまっている。

藤井　変動にどう適応するかの問題で、学部改革の問題につながってくるのじゃないですか（笑）

友松　一般教育は改革を常に念頭にいろいろ行って、決して現状肯定ではないのです。常に変革をゑんでいるわけです。

司会　改革の話がでてきましたので、話をその方に進めたいと思います。いま、本学の教養単位は古い基礎によっています。おそらく、近年中に変えなければ、と思います。では、どう変えたらいかん、その具体的なものについて……

市原　実は昨年の夏、改革調査委員会の第二次答申が出されたのです。その中で一般教育の改革も出ましたが、これはいかがでしょうか、そういう関係に立つと考えられます。とりあえず、三年次までのクサビ型のクサビ型方向、これではなかろうかと思います。

藤井　それもう二点、最近基礎教科学あるいは学際的研究法というものが必要化してまり、そういうことになると、単位の問題でないとすれば、専門科目の前提でないとすれば、専門科目と相互補完、あるいは相互浸透と思います。

秋山　ボクもそう思いますね。

佐伯　半年とか一年かけてねえ。

カリキュラムの改革

司会　このへんで、カリキュラムなどの問題にうつりたいと思うのですが……

角田　ちょっとその前に……、友松先生はマルチバーシティを否定するところにユニバーシティを再現する意味があるとおっしゃったのですが、その点もちょっと具体的に……

友松　否定するというかむしろ総合するということです。日本の大学はいろんな学部が集まったものに総合大学という称を与えてはいますが、はたして「総合」の名に価いするモノがあるかどうかです。学部間の学問的交流とか、共通の場に欠けていますね。すると、そこでは学部間を結んだり、問題を拓める境界領域学問の開発が起らない。結局、各学部がタコ壺的存在になってしまっている。

藤井　そうなんですが、ただ、その出発点でこうしたのを読めば、多少ともわかる。しかし、読まない人もたくさんいるんじゃないか？　読まんと、わからるかわからんか、わかるんですわ（笑）

佐伯　一般教養の過程でそういう教育をやっていく必要があるんじゃないですか。

秋山　ボクもそう思いますね。

佐伯　半年とか一年かけてねえ。

秋山　それは日本の学問が借りものばかりだからという問題もありますね。

市原　そういうことだけじゃなく、特殊な理由もあると思いますね。

藤井　やはり、いまの大学で……といって言っても、いわゆる「学問のうんのう（歳現）」をわめるのではないですが、とうていそれに対する批判や抵抗が学部の教育だと考え、学生にもいろいろ考えてるんですが、ほかの学部は……という部門の専門教育じゃなくて、機械なら機械、電気なら電気……という部門の専門教育じゃ、ほんとの意味の専門教育じゃないと思います。

司会　わたしは工学部ムんで、専門教育と称していても、ほんとの意味の専門教育じゃなくて、機械なら機械、電気なら電気……という部門の専門教育じゃ、ほんとの意味の専門教育じゃないと思います。

藤井　……と、一般教育と専門教育とを分けるのは、専門教育と称していても、ほんとの意味の専門教育じゃなくて、機械なら機械、電気なら電気……という部門の専門教育じゃ、ほんとの意味の専門教育じゃないと思います。

保田　区別がないという指摘のようですが、ボクはやはりあるべきだと思う。また必要だと思います。

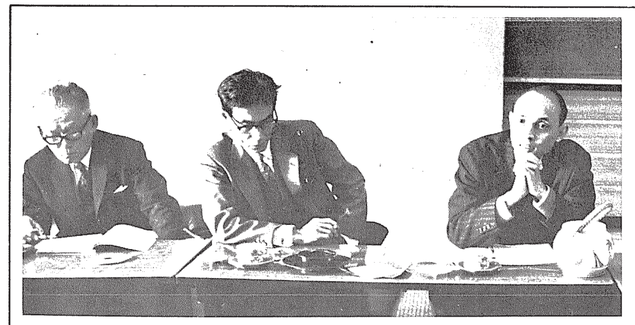
保田　区別がないという指摘のようですが、ボクはやはりあるべきだと思う。また必要だと思います。

友松　（現代は）今、さか立ちすぎると、二を逆に総化が大学では必要になってくる。そうでないと、いわゆる専門バカが学部の学問が必要となり、そこにおける高なった不の見方、考え方を消滅する。それによって幅広い人間ができてくる。まあそうでないとけないわけです。近頃てきたこの一般教養課程の傾向、これは逆うべき傾向で、市原先生のおっしゃるように、原点にかえり、再認識されなければならないのではないかと思います。

友松　総合された知識の習得とおっしゃったように思います。が、そうなると、このころは総合の一つを研究する総合専門家などもでさますし、そして、それと教養をうち続けるという問題にもなってきています。

友松　総合された知識の習得とおっしゃったように思います。が、そうなると、このころは総合の一つを研究する総合専門家などもでさますし、そして、それと教養をうち続けるという問題にもなってきています。

保田　いえ、わたしは知識習得の意味ではなくて、モノの見



出席者（敬称略・順位不同）

教養部長（文学部教授）　藤井啓行
教養部長代理（経済学部教授）　市原亮平
国語・国文学（文学部助教授）　佐伯哲夫
英語・英文学（文学部教授）　角田文雄
世界史（文学部教授）　秋山博愛
保健体育（文学部教授）　岩野次郎
政治学（法学部教授）　高尾正男
商学（商学部助教授）　保田芳昭
自然科学史（社会学部教授）　友松芳郎
応用化学（工学部教授）　大岩正芳

司会

各学部の現状

司会　富年次で、学部の現状はずしたようなゼミなどを作る、といったことも一方向ですね。

市原　そうですね。

保田　商学部内では四上年の新一年次生から適用すべく、カリキュラム改定をしました。一般教養科目そのものは、商学部独自に変えるわけにいかないですが、市原先生のおっしゃったクサビ型の……、まあ、一般教養科目は、一二年で取らなければならないというのではなく、三、四年になってもいい。そして、他方で専門教養科目を一二年にも下して行くということなのです。

司会　工学部では三、四年前より、専門生におろしておりますが。またクサビ型考えそはいるのですが、教養科目を四年に三年で持ってきて、はたして四年次で、そういうものをきくんだろうか、逆にそういう悩みがありましてね。何年次配置というワクから一般教養科目をはずそうじゃないか……、という話はしているんですが、まだ表面化していません。

藤井　学部によっては、一年次には専門科目がほとんどないんですね。

友松　社会部では、外書講読を一年次におろしています。まア一応専門科目と考えてね。法学部ではどうですか。

高尾　ええ、専門の基礎科目ということで、一般教養とは違っているんです。ほとんどは、ホームルーム的な意味合あるものです。ところで、最近は、専門科目の中で教養的なものは年からやってはどうかという意見がでているようです。

秋山　史学科も同じようなことをやっているのです。一年では史学研究法。で、ことしから史学基礎演習というのを、一週科目で、それぞれ、専門の基礎、一般教養とそれぞれ、専門の基礎、一般教養というか、それをやっています。

角田　英文学科は放送研究を一年次におろし、チュートリアル・システムというのもと、五クラスにおけり、二人足らずのものができたわけで、これが非常に効果をあげています。学生も親しみがでて、ホームルームの役にもなるし……、しかし、どうもガイダンスのときに、教養のもつ意味をもう一度、はっきりさせるべきだと思います。

藤井　実際、クサビ型というのをやろうとしたら、やはり制度的にいかなければならんのです。結局、三、四年次配置の教養科目を四年次にもってきます。いまの中で一二年位まで基礎教養、そのもの中で、必要があれば外国語あるいは専門科目まで三六年位だった一般教養を、そのもの中に入れることができる。

秋山　ボクたちは、一般教養というよりも、基礎と教養の区別でそれを考えました。

藤井　基礎科目となれば、むしろ四年次の方が適当ですからね。

保田　商学部でも、基礎的な専門科目をおろしたんです。そのほかせこそ重視するのか、主要科目と関連科目の関係の旅庵。その中で教養の答申中に基礎教育のことがでてきましたね。いまの三六年位だった一般教養を、そのもの中に入れることができる

リレー随想

未来を語る

一語学教師の夢想的未来

文学部助教授　坂本悠貴雄

一個のピルが、一日分の食事になるという程度の未来論的空想には、もはやなんの新味もないし、またそのことは、味気のあるなしは別として、さほど実現困難なことでもあるまい。ところが、一粒のピルで一つの外国語をマスターするという類の（虫のいい）発想にはお目にかかったことはないし、またたとえあったにせよ到底実現可能とは思えない。しかるが故に、語学教師の職は未来に於ても安泰かというと、さにあらずだ。

何故なら、英語錠、独語丸などは実現せずとも、それにとって代わるものといえる翻訳ないし通訳機の開発が、あながち不可能とは言いきれないからである。翻訳機――それは、学生にとっては福音となり、語学教師にとっては追放宣言となるものであろうか。

ところで、万国博の某大事務機器会社パビリオンをご想起頂きたい。そこのコンピューターと対話するためには、「セイネンガッピワ ショーワナンネン」という具合に、一種独特の非個性的音調で話さねばならなかった。つまり、それと同様、翻訳機を使う学生には、翻訳機用特殊日本語の訓練が課せられよう。たとえば「ワタクシワネコデス」と感情を交えず発話することが要求されるのである。そしてやがては世界中に、翻訳機用のモノトナスな話し方が普及するに至るであろう。すなわち、心ある人士の大いにガイタンなさるところとなるに違いない。しかし、それが、各国、各民族間のよりよき相互理解のためならば、がまんしようではないか。

さて、翻訳ないし通訳機開発の結果、日本語もどの国の言葉も、総じて蒸溜水的傾向が大となり、また語学教師が多数追放されるようなことになろうとも、私は決してくじけはしない。私は語学技師となって、いかなる音調や味わいをもつ言葉を翻訳し得る超高性能機の開発に献身するであろう。それは、ただに学生の為であるのみならず、全人類の真の相互理解の為でもあるからだ。

成功の時はいつか必ず私のものとなる。ところが発表会当日、見ばえのせぬ老人（私）を多数の人がとり囲んでなじるのだ。「オマエワセッカク進行シツツアルコトバノ統一化標準化オハカイスルノカ」すると私はいつに変わらぬ品位ある口調で穏やかに言う。「だからどうだと言うのです。」その時例えば KAWACHIC DIALECT にダイヤルを合わせた機械から威勢よくとび出すのは「セヤサカイドヤチュウネン！」あら懐しや、アランガオカノヤカタノアルジ、SSD哲学の大家、ヒゲオカキョウシュ御愛用の河内方言である、ということになれば拍手御喝采願いたい。

効果的な図書館利用を

図書館長　見次直雄

ご入学おめでとう！図書館からも新入生諸君のめでたい門出をお祝いします。

この間までは諸君は読みたい本も読むことを控えて入試準備の学習に専念した訳ですが、いよいよその必要がなくなりました。さあ差し当ってはそれらの本をじっくり読もうではありませんか。現在の大学の課程はまだ学習の面も多いですが、やはり次第に研究の面も加わって来なければならないことは、英語ドイツ語などで研究するという動詞が大学生であるという意味でもあるのに照らして当然のことでしょう。ここで図書館は諸君にとって一層なくてはならないものになります。また大学の時間割は選択の自由があるために、自分の志向に忠実であれば相当の隙間ができる筈です。この場合あらかじめ図書館利用を計算に入れておけば、抵抗なく各自に理想的な時間割が組めて あとに悔いを残さない充実した勉学が出来るに違いありません。大学の評価は学生の図書館利用率を見るのが早道だとよくいわれますが、本学では近年これが飛躍的に上昇を続けていて誠に喜ばしい限りです。

最近の私学の財政難は諸君も身を以て痛感して来た訳ですが、こと図書については大学当局は総てに優先させて、乏しいうちにも出来る限りの考慮を払ってくれて来ました。その結果、本学の総蔵書冊数は今や六十七万に上っています。そしてまた館員諸君は専門的技術に熟達し、使命感に燃えた人達ですから必ずや諸君の熱意にこたえてくれる事を確信しています。

（文学部教授）

世界の大学と学生生活

―アメリカの学生達―

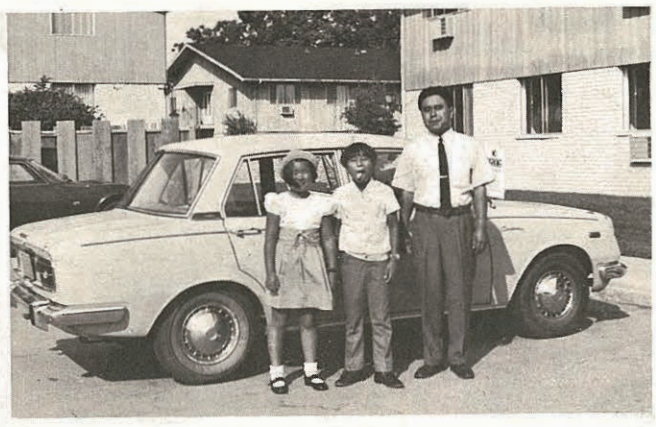
経済学部教授　小林英夫

アメリカのような異質性を特長とする社会を一般化して論ずるのはむずかしい。わたくしの滞在した（一九七〇年八月―一九七一年八月）ウィスコンシン州マジソンは中西部の一都市にすぎない。ドイツ系や北ヨーロッパ系の移民の多く住みついたところで、その風物は美しいが、東部の近代性とも西部の雄大さとも趣きを異にする。それにマジソン市そのものが州議事堂と大学のほかに何もない退屈なところで、いわゆるアメリカを感じさせるに程遠い。だが安岡章太郎氏流の感情旅行はもちろんわたくしにもあった。

わたくしと家族がマジソン空港でバーバッシュ教授夫妻の出迎えをうけたのは、アメリカの大学紛争が終焉して間もない頃だった。カリフォルニア大学とならんで紛争の中心だっただけに、ウィスコンシン大学の破壊の跡は生々しく、破れたガラス窓の上の壁に「全学あげて暴力と対決せよ」との檄文のみられるところなど日本と変わらない。だが軍の下請研究に反対する学生の手により数階建の物理学研究所がダイナマイトで爆破されたというニュースは、さすがにわたくしの度肝を抜いた。さらに驚いたのは、逮捕された犯人が自己の行為の正当性を主張しただけでなく、犯人の父親が息子を支持すると新聞記者に語ったことである。わたくしはふと映画「摩天楼」を思いだした。ゲイリー・クーパーの扮する建築家が他人による勝手な設計変更に憤慨して建ったばかりの摩天楼を爆破し、裁判で無罪になるという筋だが、まったく無関係なこの二つの話に、わたくしはなぜかアメリカを感じた。そういえばアメリカ労働運動の歴史は世界に類のないほどの暴力の歴史であった。学生暴力を取り締まるために大学が自身の警察をもつというのも、どうも日本人の常識になじまない。

しばらく滞在して皮膚の色の違いを多少とも忘れる頃になって、どの国の人間にも職業別に共通の顔のあるのを知った。たとえば農民の顔、労働者の顔、医者の顔などである。大学人もその例外でなく、多少とも世間の枠をはみでた型が少なくない。だがなによりも親しみを感じたのは学生の顔である。そのわざと汚なくした服装は日本の昔の高校生の弊衣破帽を思わせるし、ジーパン姿の女子学生がやたらと地面にあぐらをかいて坐るのも面白い。だが圧巻は学生夫婦の散策姿で、いまだ童顔のひげ面学生が赤ん坊を背負い、これまた妻でもあり母親でもある子供のような女子学生がなにか口を動かしながら夫に寄りそっている。微笑ましくもあるが衰れでもある。

大学中央図書館と州歴史協会との間にある噴水の広場には、学生レビーン教授の話だが、労働運動史家のオザーヌ教授は数年前より大学に自由の気の乏しくなったことを嘆いていた。州立大学としての限界もあり、なによりもアメリカ社会の更年期障害とでもいうべき病根の影響は無視できないようだ。そういえばアンドレ・シークフリードがアメリカの成年を宣してからすでに久しい。マジソン空港を発つとき、わたくしはふとアメリカ人の性格を評した明治時代の狂歌を思いだした。「啼かんなら、喰ひてしまへホトトギス」。そしてそのピント外れなのに思わず苦笑した。



（有名なCarillon Tower.）

（ヴアン・ハイゼ・ビルディング）

ウイスコンシン大学

話は変わるが、大学の発行した外国人留学生のための手引に、「アメリカ女子学生の誰にでもしめす微笑をロマンチックなものと誤解してはならぬ」という忠告の文章がある。最初これを読んだときは馬鹿にするにも程があると思ったものだが、実際かの女たちのにこやかさは気持がよい。見知らぬアメリカ女性から笑顔で「ハイ！」と挨拶されると、初心な独身の留学生は少々鼻の下を長くするかもしれぬ。わたくしなど努めて笑顔の挨拶を返したものだ。美しさの点で日本女性が劣るとは思わぬが、あの堅苦しさはあまりいただけぬ。

おなじアメリカ女性とはいえ、終わり、週三回（一回は五〇分間）が普通である。講義中に学生がよく質問するという話は聞いていたとおりだが、分らぬことは大して考えずにすぐ質問し、また自分の思いつきをさも得意そうにのべる傾向のあることはあまり感心できぬ。その意味では、よほど自信がないと発言したがらぬ日本の学生の態度も捨てたものではない。ただしアメリカ人学生の多くは勉強家だったように思う。教授諸氏の勉強ぶりはいうまでもない。たとえばバーバッシュ教授は、毎時間かなり長文のペーパーをタイプしてきて演習生に配ったが、わたくしは自己を省りみて恥ずかしいというほかない。

名門ウィスコンシン大学もすでに十指の座を降りたとは日本通の州歴史協会アーカイビストの肩書をもつハーパー老夫人の威厳たっぷりなのには閉口した。この協会の資料室に顔をだすのが日課だったから、なおのことである。だがそのテキパキした仕事ぶりには感心したし、とくにアーカイビストの権限の大きいのにも驚かされた。利用者の立場からいえば、日本の図書館にもあってほしい存在ではある。また古文書を始めとする各種資料の完備している点でウィスコンシン州歴史協会は有名だが、その貴重な資料を一般人や学生に簡単な手続きだけで自由にみせるところは、うらやましい限りであった。

松本暉男教授の急逝を悼む

法学部教授　槇悌次

昭和四七年三月一一日、全く突然に、われわれは若くして偉大な研究・教育者であり、友人であった松本暉男教授を失った。それは全く思いもよらないことであり、教授はその前日教授会に出席され、われわれと話合いをされたばかりであり、修士論文審査のため面接をされたのもつい先日のことであった。われわれの前にまたひょっこり姿を現わされ、肩を叩きながら学問や人生について語りかけてくるような気がするのも、私一人ではあるまい。

教授は昭和三年京都に御誕生、府立一中、三高を経て東大に進まれ、大学院の二年目には早くも、シャレイの『財産の歴史』を翻訳、クセジュ文庫より出版されている。そして、川島教授門下の逸材として本学に招聘されたのが昭和三三年であり、以来一四年、研究・教育上はもとより、社会教育その他広範な分野において、数多くの足跡を残されている。

恐らく本学の学生で教授の名を知らない者は殆んどないであろう。また、学部を超えた熱烈なファンも少なくない。教授は幼い時からすばらしい頭脳の持主であったが、いわゆる秀才型の人間とは違っていた。まさに天真爛漫、自ら甘えん坊であるとともに、他人の甘えをも受止める、純真そのものの、童心・童顔の人であった。その子供好きは、自宅を開放して日曜学校を開いた程であった。もちろん、子供達ばかりではない。八百屋のおばはんも、魚屋のおっさんも、タクシーの運ちゃんも、教授に接する者は皆その人間的魅力のとりこになった。いかに多数の人々が、大学人と社会人とを問わず、男も女も、思想・信条を超えて教授の下に集まり、社会と人生を論じ、また酒を酌み交したことか。

教授の学問もその人間性とともに異彩を放っている。教授は家族法と法社会学の研究者として著名であり、特に家族形態の多様性に注目した新しい家族法学の樹立を試みられていた。そして、その成果は数々の著書・論文となって公表されているが、教授はただそれだけの人ではなかった。一方では、調査や研究会のために、しばしば学生と起居を共にされ、他方、婦人の地位の向上を念願して、自ら実践活動に取り組まれるとともに、さらに、市民のための法律を目指して講演会やマスコミでの活躍を続けられていた。『コンパクト六法』は人の知るところである。

教授は、先年最愛の御子息を失われて以来、その生活は自らの肉体を責め苛まれるばかりの御様子であったが、今その悲しみを抱きつつ、心不全によって急逝された。誠に惜しみても余りある人物を失ったものであり、社会的に大きな損失といわなければならない。謹んで哀悼の意を捧げる次第である。

ゼミ旅行にて（前列が松本教授）

編集後記

四月は大学にとっては新年に当たる。そこで本号も、型どおり、新年度号らしいスタイルとなった。特に新入生を対象とした内容が多い。だが、新入生のみでなく、すでに在学している諸君も、心新たに新学期を迎えていただきたい。